



全國農業協同組合中央会会長賞

ぜん こく のうぎょうきょうどう くみ あいちゅうおう かい ちゅうしょう

もじ 文字を書かない文通

千葉県柏市立光ヶ丘中学校三年

廣瀬 美紀

「行ってきます。」

私は重いラケットバックを背負い、学校へと向かっていた。その日は約二年半続けてきた部活の、最後の一日前練習の日だった。そして「最後の部活弁当の日」でもあった。

その日のお弁当は、おにぎり二つとおかずが少し。いつもと変わらない組み合わせだった。お母さんは部活の弁当と言うと、決まってこのスタイルの弁当を作ってくれていた。今はこのおにぎり二つとおかずが少し、というスタイルを気に入っているものの、まだ部活に入つてしまもなかつたあのころは、このスタイルが嫌で嫌でたまらなかつた。

他の子はサンドイッチやおしゃれなおにぎりなど、かわいいくておいしそうなお弁当だつたのに、私は中に梅干しが入つただけの地味なおにぎり。それがただひたすら恥ずかしかつたのだ。そしてつい

「なんであるな地味な弁当作るの。」

とお母さんに怒鳴つてしまつた。後悔先立たず。それから母は弁当を作ってくれなくなつた。しかたなく私は、ずっとコンビニのパンを買って食べていただ。

すると、何日か経つたある大会の日の朝、起きるとひさしぶりに弁当を作る母の姿があつた。驚いてしばらく立ち尽していると「運動しているのにコンビニのパンなんてありえない。あなたは見た目で判断してますね、梅干しは熱中病予防になるし、パンよりもお米の方がエネルギーになりやすいんだから。」

と言つてきた。そのとき、私は感謝と罪悪感で涙があふれて止まらなかつた。ここまで考えてこのおにぎりを作つてくれていた。なのに私は。そう思うと、見映えだけを気にしてお母さんを傷つけてしまつた自分に腹

が立つた。そんなひどいことを私はしてしまつたのに、今、母は忙しくて応援に行けない分、前のようにおにぎりで私の体をサポートしようとしてくれていた。

今改めて考えてみると、このおにぎりじゃなければここまで部活を続ければれなかつたかもしれない。どんなときも、このおにぎりは思い出のワンシーンに登場してくれる。悔し涙を流した日、みんなで抱き合つて喜んだ日、雨の日、暑かつた日、寒かつた日。過酷な練習を乗り越えられたのも、あのおにぎりの目には見えない栄養素達が私の体を支えてくれたから。そして、たくさん込められたお母さんのパワーをもらつてから。まるで、お母さんの分身かのようそばにいてくれた。

だけどそれだけじゃなかつた。もちろんあのおにぎりは不器用で気持ちを伝えるのが下手くそな母からの精一杯のエールだつた。逆に、反抗期で照れくさい私からも、ラップをきれいにたたんでキッキンに置いておくことが、精一杯の感謝の表し方だつた。このやりとりは、お互に意地つぱりで素直になれない母と子同士の文字を書かない文通だつた。あのおにぎりがなければ部活を続けられていなかつたかもしれないという以前に、母子のコミュニケーションを保つ上でのかけがえのない存在だつた。

部活を引退してから早くも半月が過ぎた今、あの部活弁当は受験弁当へと変えられた。今年の夏から塾に行き始めた私にとつて、慣れない中でたくさんの課題をこなすのは大変どころの問題ではなかつた。その分ストレスで母にやつ当たりしてしまつたこともある。だけど、今は母も大変さを受け入れて、私の怒りが収まるまでつき合つてくれる。そして、塾のお弁当もかかさず作つてくれる。

あのおにぎりは相変わらずで、塾でも

「梅つてしまいね。」

つて少し笑われる。だけど今は、胸を張つて

「私は梅が好きなんだ。」

つてはつきり言える。あのおにぎりは、お母さんと私を少し変えてくれたような気がする。